



新年のご挨拶

圭陵会会長 齋藤和好

新年おめでとうございます。

皆様御存知の如く、一昨年(2018)の4月20日に、岩手医科大学創立120周年記念式典が盛大に行われました。先人達の築いた建学の精神を胸に、なお一層努力し、将来の発展に向かって、輝かしい、そしてさらに新しい歴史をつくるべく、本学管弦楽団の生演奏をバックに力強く校歌を皆で斉唱し、誓い合ったことがつい昨日のように思い出されます。

創立120周年記念事業の一環として、看護学部も加わり名実共に4学部を有する医療系総合大学となりました。2019年9月には、高規格の新病院も矢巾に完成するでしょう。建設中の病院も次第に外観の全容が姿を現し、当地の新聞(岩手日報2018-8-14)にも「新病院の建設進行率65%…」 「県内地価上昇率矢巾町で最大…」 「サケがわが古里に帰ってきた…」 (同2018-9-25) も含めて華々しく報道されました。

「圭陵会」の名前の由来について

当時の一期生が、同窓会の名前を刀圭の「圭」、杜陵の「陵」を合わせて「圭陵会」と提案しようとして決めたのが、午前3時、正式に決定したのが、同昭和7年12月18日午後7時46分のことであり、同時にその圭陵会の会則については第2条の目的の項の文頭に「岩手医学専門学校の向上発展を期し…」と謳うこととしたということです。(岩手医科大学圭陵会50年史、1983)。

昔の大先輩の「会」創立時のご苦勞を偲び、愛校心を胸に「医療人たる前に誠の人間たるべく」頑張りましょう。記念募金が途中半ばの状態ですので、「財政を強固」にするためにも物心両面から更に絶大なる支援をいたしましょう。

又、特に医学部国家試験成績向上対策について皆様も御心配なさっているかと存じます。全学生には、入学時に医学を専攻した事実を完全に受容し、その大志を卒業時までしっかりと維持し完成させることを第一目標にして欲しいと願っております。教員の先生方の御努力には頭の下る思いですが、特に学生の甘えの気持ちを捨てさせ、学生共々目標に向かって必死に頑張らせて欲しいと思います。

我々圭陵会員でも何か力になれることがありましたら、ご遠慮なく申し付けて欲しいと思っております。私自身の会長歴もまだ浅く、各支部の様子を知りたい、又知らねばならないと考えておりますので、機会がありましたらどうぞお声掛け下さい。

皆様からいただいた御提案・御要望に検討を加え、それを実行に移すことにより、我が圭陵会ひいては母校の発展にいくらかでも役に立てば…と考えております。

最後に、お疲れの時には校歌(CD)を聞きながら母校岩手医科大学の向上発展を想うのもいかがでしょうか！



新年のご挨拶

学校法人岩手医科大学 理事長

小川

彰

あけましておめでとうございます。圭陵会の皆様にはご健勝で新年を迎えられました事お喜び申し上げます。

いよいよ、矢巾新病院の全貌が見えてきました。周辺の道路の拡幅整備も進んでいます。正面玄関前の公道から望む新病院は巨大でその威容は周囲を圧迫するほどです。A敷地とつなぐ空中廊下も未だ骨格だけですが道路の上を通りました。矢巾町民も「いよいよだ」と期待を膨らませています。空中廊下に隣接する店舗棟（トクタヴェール）、その東に位置する健康プラザ（コスモス館）、そして、ホテルの建築も始まりました。300室のホテルは10階建て10階まで鉄骨が組みあがり全体像が見えてきました。また、「岩手医科大学やはばなかよし保育園」は既に完成し引き渡しを受けました。保育室からは病院、ドクターヘリの発着も見え、素晴らしい保育環境です。2月1日には開園の予定です。医療人の子弟が病院の威容とドクターヘリの発着を見ながら保育を受け、将来医療人になる夢を持ちつつ成長して行くことを期待しています。

引っ越し業務は長期にわたりますが、患者さんの引っ越しは1日で完結しなければなりません。1,000床の病院を、患者さん付きで、9kmもの遠くに引っ越しする「大プロジェクト」は前例がありません。作戦実施日は3連休の初日9月21日（土）です。患者搬送に使う救急車等は消防隊や各病院、自衛隊やタクシー会社所有のもの全てを動員します。交通規制等には各自治体、警察の協力を仰ぐことになります。当日またその前後に長く続く引っ越し大作戦は日本通運にお願いする事と致しましたが、既に内丸キャンパスに

事務所を構え、「何を」「何時」「どの様な方法で」搬送するか作戦を立て始めています。様々な分野で事前準備が進んでおります。世紀の一大プロジェクトが完遂し新病院での診療が開始されるまで、気の許せる状況にはありません。安全で事故なく、新築移転が完了できるように、全学の全ての教職員が心を一つにして努力してまいります。

一方、矢巾本院新病院は予定通り開院しますが、内丸は当面現病院の建物を利用して、外来中心の内丸メディカルセンターとして運用します。内丸メディカルセンターは来院患者さんの交通の利便性を考慮した高規格外来病院、矢巾本院は日本一の手術室数を誇る高規格の治療病院として一体的に運用する予定です。

しかし、内丸の既存の建物は昭和30～40年代の建物であり、内丸メディカルセンターを新築するまでこの事業は終わりません。現歯学部部分に新内丸メディカルセンターを新築し現循環器医療センターの建物を改修し運用します。通りを挟んだ現西、中、東病棟部分は1号館を除きすべて解体し、都市再開発事業として新たな利用法を岩手県、盛岡市、商工会議所等と策定中です。本学1号館は東京駅丸の内駅舎を設計した葛西萬司氏の作品であり、当時不燃建築物として初めての大正ロマン漂う建物です。本学120年の歴史を伝える記念館としての活用を予定しています。

圭陵会の皆様には、新内丸メディカルセンター完成まで更なるご支援とご協力をお願い申し上げます。新年のご挨拶とさせていただきます。



新年、おめでとうございます

岩手医科大学 学長 祖父江 憲 治

明けましておめでとうございます。圭陵会の先生方におかれましては、御家族共々に健やかな新年を迎えられましたこととお慶び申し上げます。また、日頃より本学への温かい御理解を賜っておりますことに感謝申し上げます。併せて、先生方の御支援により、矢巾新病院が開院の運びとなりましたことに、心よりお礼申し上げます。

本年9月には、1,000床規模の世界屈指の矢巾新病院が開院します。現在、外装工事が終了し、内装工事の段階に入っています。矢巾新病院開院時には、内丸の現附属病院に入院されている患者さん600名(予定)前後を、矢巾新病院に搬送する一大プロジェクトを行います。盛岡(内丸)から矢巾へ片道約9kmの距離を搬送するもので、患者さんの搬送人数も移動距離も我が国では最大規模の大搬送計画となります。何一つトラブルなく搬送することが絶対条件であり、本学のスタッフと県医師会・郡市医師会・県警・消防署・自衛隊と岩手県・盛岡市・矢巾町などの皆様にご協力を賜り、この大プロジェクトを完遂してまいります。

また、矢巾新病院の開院後は矢巾新病院と内丸メディカルセンター(現内丸の病院を当面の間は使用し、外来中心にした内科と歯科診療と50床の入院病棟を有する)の二大病院運営という、本学にとっては未体験ゾーンに突入します。この試練を乗り越えて、矢巾新病院は入院を中心とした先進医療病院、内丸メディカルセンターは外来を中心とした高度治療病院としての役割を果たすこととなります。本学建学以来の根幹である地域医療と、先進医療による特定機能病院という県民の負託に答えていかなければなりません。さらに、内丸メディカルセンターの新・改築を早期に実現し、本学の二大病院が各々の役割分担を果たしながら、

岩手県のみならず北東北、さらに東北の医療拠点として機能すべく使命を担っております。

矢巾新病院と内丸メディカルセンターは医療系総合大学として、医・歯・薬・看護学部の学生諸君にとっては、壮大な実地教育病院となります。また卒業後医療人教育においても、本学のみならず全国からより多くの医療人を受け入れ、高度専門医療人へと育成し、本学から岩手県のみならず北東北、東北さらには日本全国へ輩出してまいり所存です。

学生教育におきましては、全学部の一部1・2年生に低学年クライシスと言われる現象が顕著になってきています。これは本学のみならず、全国的な問題です。入学が人生の最終目標で入学後に将来の目標を見失う、勉強方法(ラーニングスキル)が分からないなど、原因は様々です。この低学年クライシスを解決出来ないままに進級した学生は、高学年になってついていけないという事態に陥ります。早期に低学年クライシスを見つけ出し、解決することが重要で、教育現場の教員共々留意しながら、学生諸君が明日に向けた希望を持たせる大学にすべく努力してまいります。

時代と共に世相を反映するかの如く、学生気質も大きく変わっています。しかし、いかに世の中が変わっても自己のidentityを失っては、その存在意義さえ問われることになりかねません。このidentityの根底にあるのは、愛校心であり愛国心ではないかと思えます。学生諸君にとって勉強は当然のことですが、卒業後に母校を思い出すそんな大学にしていまいりたいと思えます。

先生方におかれましては、今後ともに御指導賜りますことをお願いしまして、新年の挨拶とさせていただきます。